



天文学者が解説する 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』と宇宙の旅

谷口義明 著

光文社新書, 344頁, 定価1,100円+税

解説書
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

本書は宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』を題材に宇宙や天文現象を解説する一風変わった一般向け天文解説書である。私自身賢治についてはこれまで『銀河鉄道の夜』や『注文の多い料理店』を読んだことがある程度だったが、岩手に赴任して以来、多方面で才能を発揮した地元の偉人ということで何となく気になる存在になった。しかも『銀河鉄道の夜』ってよく考えたら1930年頃に書かれており、そもそも（今では当たり前の）銀河という概念すら当時まだよくわかってなかったはずである。そこで賢治の時代の宇宙観や彼の知識がどの程度だったのかが気になり、それを教えてくれる都合の良い資料でもないかなあと考えていたところにちょうど本書が出版された。谷口さんには大変感謝している。

本書は大きく2つの章からなる。第1章では賢治の生い立ちや人物像、そして賢治が生きていた時代の天文学・物理学がどの程度理解されていたかを解説している。第2章では実際に『銀河鉄道の夜』を読み進め、宇宙や天文現象に関わる様々な描写について天文学者の立場から科学的に読み解いている。著者や一般読者にとっては第2章が本書のメインと思われるが、私個人としては第1章に特に興味を持って読んだ。

第1章で当時の宇宙観を解説するにあたり、著者は神保町の古書店を歩き回り当時の日本の天文書籍（実際に賢治が愛読していたと思われる書籍含む）を掘り起こしている。それを読み通したうえで解説は非常にリアリティが感じられ、同時に賢治は当時としては研究者顔負けの天文知識を有していたことが伺える。また賢治の年齢と科学史を比較した年表は、相対性理論やハッブルの法則など物理学・天文学の激動の時代に生きていた

ことがわかり面白い。そして本章の最後に出てくる賢治と画家のゴッホの共通点に関する話題は大変興味深く、トリビアとして思わず人に話したくなる内容である。興味ある方は本書をご覧ください。

第2章は『銀河鉄道の夜』を一読したうえで読むことをお薦めする。原作を読んだ人ならわかると思うが、ファンタジーな反面すぐには理解しづらい表現が多々ある。本章ではそのような描写を取り上げ、科学的な考察をもとにその実体を突き止めている。特に「天気輪」の正体について筆者は計12種類の自然現象について仮説を立て、50ページ以上を割いて各々考察し、1つの結論を導いている箇所は圧巻であった。ただ、ジョバンニとカムパネルラが「風のように走った」という何気ない下りを銀河系の回転曲線と結びつけて本当に風のように走ったのか検証する箇所などやや考えすぎではないか、と思う節もあったが、そこはご愛嬌だろう。

本書を読み終えての感想は3つある。まず賢治の時代の宇宙観をこの一冊で要領よく知ることができて個人的には大変すっきりした。2つ目に、やや消化不良だった『銀河鉄道の夜』の世界が実体としてイメージしやすくなり、改めて読んでみたくなった。そして3つ目は、賢治はやはり偉大ということである。彼は今の私と同じ年齢で生涯を終えるまでに文理芸術にわたり卓越した功績を残し、かつ天文学においても研究者並みの知識を備えた正真正銘の天才だったのだ。本書は平易な天文入門書というだけでなく、賢治の生き様や『銀河鉄道の夜』をひと味違った角度から読む楽しみも与えてくれるお薦めの一冊である。

秦和弘（国立天文台 水沢VLBI観測所）